

様々なレベルの学生に対する「保育士として大切なことは何か？」 を音楽の視点から考察する

國井 真美

はじめに

短期大学の保育科という環境の中で出会う学生たちの音楽経験値は実に様々である。義務教育の授業に組み込まれてきた鍵盤ハーモニカ・リコーダー・合唱などは、一通りの共通経験として全員に有るものと言える。しかし、部活動で音楽と深く関わりを持ってきた経験や個人的に楽器演奏を習ってきた経験、これらが有るのと無いのとでは、その経験値は大きく違ってくる。

こうしたことを踏まえると、学生の入学時の音楽経験値は当然ながら一人一人が違うため、個々の音楽レベルに応じた指導と課題の与え方が非常に重要であると言えよう。

ここ名古屋短期大学保育科の現在では、1年次にピアノ演奏の個人レッスン（バイエル・幼児歌曲伴奏）、2年次に幼児歌曲の弾き歌い（弾き語り）と声楽レッスン、というカリキュラムとなっている。最初の1年間にピアノ演奏を主とした授業を、その後の1年間で歌を主とした授業を受けるこのスタイルは、25年以上の長きに渡り続いてきた経緯がある。

そこで今回、音楽という視点から見た「保育士として大切なことは何か？ 保育士になる学生に何を伝え教えたいのか？」というテーマを、ピアノ指導者からの観点、加えてこれまでの指導経験を下に考察してみたい。

1. 指導プランの方向性

先にも述べたように、入学時の学生のピアノ演奏レベルは、実に様々である。しかしレベルがどうであれ、1年次にバイエル教本の修了を目指すカリキュラムとなっており、経験値ゼロの学生にとっては、かなりの努力を要することとなる。初心者にとってはピアノ演奏をするための基礎知識を得ることから始まり、全てが未知からのスタートとなるため、個々の能力に応じた指導に加え、精神面での寄り添ったサポートも必要となる。

数年のピアノ経験がある学生も、基礎知識や読譜力に乏しいことが多く、初心者と同様の指導とサポートが必要となる。

6～7年以上のピアノ経験がある学生は、読譜力がある程度あり弾くことにも慣れているため、日々の練習にきちんと取り組みさえすれば年内にバイエル修了となる場合が多い。だが、時に自己流で悪い癖が抜けない学生も居り、それを正していく労力も必要となる。そうすると進度も落ち気味となり、少々苦戦することとなる。

いずれにせよグループ内での個人レッスンを主とした形態であり、一人一人の学生のレベル

に応じた柔軟な指導が大切である。マンツーマン形式の個別対応を軸とした授業のため、指導内容は多岐にわたる。

2. 初回授業にて

初回の授業では、事前の音楽歴アンケートをもとに学生一人一人からこれまでの音楽経験を聴取し、ピアノ未経験の初心者のみを把握する。その後、残り全てを経験者として括り、名簿順に1グループ6～8名に分け、担当教員が決まるとクラス編成が完了する。このため、クラス内のレベルは様々でありバラつきがある。そこで、学生一人一人に更に聞き取っていくと、経験者グループは例年以下のように分類される傾向がある。

- ・高校在学時に1～2年ほど習った経験者
- ・小学生時に4～5年ほど習った経験者
- ・幼少期から中学入学時まで10年ほど習った経験者
- ・幼少期から現在まで12年～15年ほど習った経験者

こうした聞き取りによって細分化されたデータは、個別対応の個人レッスンをしていく上で指導者が知り得るべき情報であろう。このような個々の音楽歴を念頭に置きながら1年間のレッスンを展開させていくことが大切である。

また、クラス内の学生のレッスン風景は、お互いに見て学ぶことが出来るため学習成果に於いても様々なメリットがある。これは「人前で弾くことに慣れる」という保育士としての資質を高めることにも繋がっており、お互いを励ましあい刺激しあえる良い環境であると言える。

1年次のピアノレッスンから2年次の声楽レッスンへの移行をスムーズにしたい、という事を考えると、指導者から学生への到達度設定や学生自身の目標設定など、相互間で確認しあいながらレッスンを行うことが望ましい。

ピアノ指導者として、学生に何を伝え教えるか？ レベル別に事例を挙げながら考察する。

3. 初心者

初心者の指導は、まず五線の仕組み、つまり音符の読み方、そして様々な基礎知識を説明する。教材となる「バイエル」は、幼稚園教諭・保育士を目指す人のために編集された教本を使用する。最初に「バイエルを始める前に」という導入のための補足説明があり、初歩からスタートする学生にも大変解りやすい。譜表、拍子記号、音階、音楽用語、強弱記号、発想記号、奏法上の記号や用語、指番号、手の置き方に座り方、これら全てが簡潔に示されている。

多くの学生たちは直ぐにバイエル12番あたりからスタートさせていき、ここから先は本人のやる気次第、そして日々の取り組み方と練習量にかかっている。真剣に真面目に取り組み、1ヶ月で30番台から40番台へ順調に進んでいく学生が多いが、中には不器用さから気落ちしてしま

いスタート早々に不安と苦悩に陥る学生もいる。取り組み方や気持ちの問題が大きく作用し、進捗状況に明暗が出てくるのである。

前者はバイエル後半で難しくなってきたとしても、粘り強く諦めずに練習することが出来、たとえ進度が遅くても1年間で修了できる可能性が高いと言える。しかしながら、後者はなかなか厳しい状況となる可能性が高く、レベルに応じたサポートが非常に必要となる。

このようにして展開されていく1年間のレッスンの中で、初心者にも最も身に付けて欲しいと願うことは、やはり「読譜力」である。正しい音、正しい拍子、正しいリズムが読み取れる基本的な知識と、正しい指使い、正しいフレージング（まとまり・句）で演奏できる基本的なテクニックが身に付いたら上出来である。拍子とリズムの密接な関係性、指使いとフレーズの密接な関連性は、理屈として知っておくべき知識であろう。この説明をしないまま弾くことだけに意識を向けさせてしまうと「読譜」という最も基本的なことを理解しないままになってしまう。拍子や拍を理解することで正しいリズムが存在し、指使いを守ることで正しいフレージングが生まれるのである。「読譜」とは音符だけを見ればいいのではなく、譜に記載された全てから曲の解釈をすることでもある。こうした日々の積み重ねで読譜力が鍛えられていくのである。

幼児歌曲に於いては、子供が歌いやすいようメロディーラインに歌詞（言葉）が充てられた場合が多く、言葉の区切り（句）を配慮した弾き方が望ましい。それには、歌詞をきちんと理解し音楽としてのフレージングを正しく捉えなくてはならない。そうした感覚を習得するためにも、主としてバイエルの練習曲に取り組む中で、フレーズ（まとまり）を意識させる指導は必須である。

「楽譜をきちんと読む」ことがいかに重要であるかを早い段階で実感できた学生は、取り組み方、練習の仕方が上手く、比較的スムーズに進んでいくことが多いと言える。一方、楽譜をよく見ずに練習してしまうと様々な問題点が出てくることになる。例えば、勝手な指使いで弾いて連なりが悪くなりフレーズが崩壊する、拍を意識せずに弾きリズムが崩壊する等、合格するには程遠い状態となる。何拍子の曲かさえも理解しないまま弾いている学生も多い。教本の冒頭にある基礎的な知識を理解した上で練習しなければ、意味のない無駄とも言える練習になってしまう。そのため、練習の仕方がいかに大事であるか、を幾度となく説明し納得させていくよう努めている。

そのようなアプローチをしないと、練習しているにも拘らず上達しないことで混乱し自信喪失していくという負の連鎖が起きていく事となる。

よって、初心者の指導は最初が肝心だと断言できる。そして学生の理解力に寄り添い、成長に対して指導者が忍耐強く「待てること」も重要であると痛感する。今何が理解できていないのか？に関心を持って明確な解決策と練習方法を示すことが出来るよう心掛けている。

また昨今は、学業だけに没頭できる学生ばかりでないのも実情である。多忙な日々の中で一人黙々とピアノに向かわねばならない「練習」という作業は、初心者にとっては想像に難くない。

挫けそうになる気持ちにも寄り添いつつ、いかに希望と自信を持たせられるか？にかかっている。こうした精神面でのサポートも特に初心者に対しては必要であり、バイエル修了というゴールに向けては、学生とのコミュニケーションも重要な役割を占めると言えよう。

4. 高校在学時に1～2年習った経験者

ここに該当する学生の多くは、楽典的な知識も少しずつ増えピアノを弾くことにも少しずつ慣れてきた、といったところであろうか。それでもやはり「授業についていけるのか?」「バイエルは修了できるだろうか?」といった不安や心配の方が大きいと言える。

しかし時折、たった1～2年でここまで弾けるようになるものだろうか? と、その努力と成果に感心させられる学生に出会えることもある。

「保育士になりたいという希望を叶えるためには何が必要であるか?」と学生たちに問いかけた際、「ピアノが弾けて歌が上手に歌えること」という返答が多い。もしかしたら一般人の多くもこの様なイメージを持っているのかもしれない。保育士と言えば「子供好きでピアノが上手である」という思い込みから、学生にはそれがプレッシャーになっている様に感じることもある。

しかし、保育士という職業に小さいころから憧れ保育士になるのが夢だった、との秘めたる思いを胸に進学を決めている学生が意外に多い。聞けば「ピアノの経験がないのに保育士になれるのだろうか?」という不安が大きかったと言うが、将来の職業を考えた時「夢だった保育士になろう!」と。こうして諦めずに進学してきた学生の思いに触れると、指導者としても熱い気持ちになる。高校在学時から習い始めたという事は、未経験であることの不安を少しでも早く解消しようと自ら努力してきたという事である。この前向きな気持ちを入学後も引き続き持ち続け、努力していく事ができれば先は明るいと言える。

ピアノの経験が浅い、または苦手、等の様々な不安要素を持って入学してくる学生に対しては、やはり一人一人とのコミュニケーションが重要だと言える。初心者の指導と同様、最初が肝心であり、精神面のサポートも重要である。

既に数年の経験から、練習を日々継続していくことの難しさに悩んでいる学生も多い。バイエルが1年間で修了できるのか? という不安は、初心者が抱くそれよりもむしろ現実味がある。一人一人の気持ちや悩みに寄り添い、励む気持ちを支えながらレッスンしていくことが望ましい。

そんな学生たちに1年間のレッスンで習得してほしいのは「読譜力と練習方法」である。読譜については前項で述べた通りである。初心者よりも音符が読める余裕の有る学生に対しては、譜の見方について積極的に進めていく。解釈によって表現力が豊かになることを実感してもらうことで読譜の作業に興味を持たせ、意欲的に学んでいけるよう導きたい。

練習方法については、どのような練習をすれば上達が早いか、また悪い練習とはどんなものか、を早い段階で説明し理解させている。ピアノ歴1～2年ということで、学外で習っているピアノ教師に引き続きサポートを受けている学生も居る。そこでの指導がどの様なものかにもよるが、聴取する限りでは多様な練習方法を知る学生は少ないと言える。

「どんな練習をしているか?」「どんな練習をしたら良いと思うか?」を必ず訊ねるのだが、ほとんどの学生が「片手ずつ弾く」と答える。そこで更に「それ以外にはどんな方法で練習しているか?」と訊ねてみると、すぐに答えられる学生は少なく、悩んだ末に「何回も、何十回も弾く」との返答を得ることが多い。

結論から言えば、片手ずつ弾く事も何十回も弾く事も、実にシンプルな練習であり正解の一例と言える。だが、この方法だけで弾けるようにするには、そこに意味を持たせて効果的に回数を重ねている場合に限る。例年この様なやり取りを学生と繰り返すことから、上達する為に有効な練習方法を教えていく事の大切さを痛感している。

多くの学生が苦戦している事の1つに、片手のみの演奏はスムーズに出来るのに両手で弾くことが出来ない、という事例がある。両手で演奏した時の音の絡みがイメージ出来ていないうちに両手で合わせようとするからであるが、「左右違うことをしながら、そのどちらもが聴こえること」に慣れないうちは、なかなか難しいであろう。

そこで、私がどの学生にも提示する練習方法が2つある。1つ目は「歌って弾くこと」である。出来ればドレミ唱であることが望ましい。バイエルでは左手が伴奏を担当している曲が大多数を占めるため、まずは片手ずつ見ていく。右譜に書かれた音（メロディー）を歌いながら右手演奏をし、左譜に書かれた音（伴奏）を三和音にして響きを確認したら、譜面通りに左手演奏をする。これが出来たら、両手で合わせようとする前に、左手演奏をしながら右譜のメロディーを歌う（右手はお休み）という練習を根気よく行う。両手で合わせた時のイメージがピアノの音（左譜伴奏）と自分の声（右譜メロディー）によって確認しやすい。また、この作業をすることで理解が深まり、脳から指への指令がよりスムーズになると認識している。慣れるまでに訓練が要る練習ではあるが、日々の練習で実践できそうな学生に対しては勧めている。この練習法が習得できた学生は、両手演奏の苦手意識が少しずつ解消され、自信を持って練習に励んでくれるようになる。

ピアノ演奏は指が鍵盤を押し音が鳴れば成立する楽器なのだが、「旋律を口ずさむ」「鼻歌のように歌える」ことは、楽器を演奏する上で出来た方がよい。それは、歌えれば弾けるようになるからであり、「演奏すること」と「歌うこと」は密接に深く関連しているからである。

そして、この練習方法は幼児歌曲にも応用できる。2年次に主に幼児歌曲を学ぶカリキュラムであるため、1年次にぜひ習得して欲しい練習法である。伴奏をしながら歌詞を歌えるようになるためには、バイエルに取り組んでいる段階から歌いながら弾き、口を動かすことに慣れていくことが大切である。こうした練習を1年間積み重ねる事は、前述のような大きな意味があり、大きな成果へと繋がるだろう。

2つ目は、「ゆっくり弾くこと」である。ほとんどの学生がゆっくり演奏することが苦手なようである。なぜこの練習が大事なのかと言えば、自分の弾いている音を聴いて欲しいからであるが、聴きながら弾くことは実は大変に難しい。簡単に出来そうなことと思われがちだが、決してそうではない。1つ目に挙げた、歌って弾くことが苦手な学生も「ゆっくり弾くこと」を根気よく続けることで歌えるようになり、ゆくゆくは「聴いて弾くこと」にも繋がっていくと考えている。弾けもしない速さで弾く、メロディーをかき消すほどに伴奏が強い、弾けていない箇所だけ遅くなったり速くなったりする等は、日々の練習で聴いて弾いていない悪い癖の蓄積によって起きる失敗例である。

1年間で良い練習習慣を身に付け、読譜力、練習方法、楽典知識をそれぞれバランス良く習得させることで演奏力も十分に向上した、と感じてもらえる指導を心掛けたい。楽典的な知識のレ

ヴェルも、個々に確認しながらレッスンしていくことが大切である。どの程度の理解力があるのか、間違った解釈はしていないか等の把握は、指導していく上で重要である。

5. 小学生時に4～5年習った経験者

ここに該当する学生は、バイエルを修了させる上での不安要素は少ないと言える。学生の精神面も然程心配することはなく、習っていた頃の記憶を手繰り寄せながら自分のペースで練習に取り組む学生が多い。が、レヴェル的には一括りにしづらく、個々の理解度や熟練度は一人一人に違いが見られ実に様々である。そのため個々のレヴェルに応じた指導となる傾向が強く、指導内容は多岐にわたる。

前項で示した練習方法をこなせる学生は、コツコツと練習を積んでバイエル修了を達成できる。ただしそれには課題をペース配分して提示する指導者の配慮を必要とする場合が多いと言える。弾けない、解らないという不安要素が少ないからか、学生も指導者もお互い油断していると進みが遅くなり、危うく修了出来なくなる可能性も有る。そのため、半期ずつの到達目標をしっかりと持たせ、日頃から意識させるよう促すことが必要である。

また、これは少ない例ではあるが、特にこの4～5年程度の経験者に見られる特筆すべき事例がある。止まり弾き、弾き直し、頻発する音間違い、拍子不明のリズム間違い、自己流の指使い、といった悪い癖があり、その改善が直ぐには困難な例である。間違いだらけであっても、止まりながら何とか強引に最後まで弾き通してしまうので、厄介なことに「弾けている」と勘違いしていることが多い。これまでの練習方法が悪かったことが原因ではあろうが、身につけてしまった悪い習性を正していくには、まず自身の状態に気付かねばならない。気付く事が出来れば、正しい練習方法に改めることで次第に良い習慣が身に付いていくだろう。

2年次の授業で弾き歌いを熟していくためには、こういった悪い症状を放置する訳にはいかないのである。このような状況に直面した時には、指導者も学生もお互いに根気と忍耐が必要であり、サポートする環境作りと励まし続ける姿勢を示している。

導入期における「基礎知識」や「読譜力」の指導は、やはり最初が肝心であり、丁寧に行うべきであると痛感する。

さて、ピアノ歴5年ほどの学生に対しては「止まらずに演奏をする」に加えて「表情のある演奏をする」という目標を置くことが多い。譜面どおり正しい音で止まらずに演奏することは当然の目標として、一歩進んだ「表現する」ことにも積極的に意識させるよう導いている。

表情豊かに演奏するとはどういうことか？ 先ずは楽譜に書かれた様々な記号や発想記号から曲の持つ雰囲気、つまり曲調を読み取り全体を把握する。そして更に細かい部分にも目をやり、フレーズを読み取り、強弱記号や楽語などから解釈を付け加え理解を深めていく。

こうした手法により曲のイメージをしっかりと持って演奏できることを体験させ、表現することの楽しさと、表現することの大切さに気付いて欲しいと願っている。しかし「表現力」を示すことは、弾くことに余裕がなければ出来ないことでもある。頭の中にイメージがあっても、それを演奏に反映させることは誰にでも出来る事ではないが、保育士としては必要なことであろう。

ウキウキするような楽しい曲ならばそのように、寂しげな哀愁のある曲ならばそのように聴き手に伝わることは、保育士が音楽を使う場面では必要な要素である。

音楽を通して様々な感情を幼児と共に体験すること、正に共感しあい共有できる事は、保育士にとって醍醐味の一つとなる。それ故に、保育士が憧れる職業であることにも繋がるのだろう。

幼児たちの心にいつまでも残り思い出となる様な体験を、音楽を通して与えられる様な保育士になってほしいと願うばかりである。

6. 幼少期から10年ほど習った経験者

ここに該当する学生はレベル的な問題も少なく、楽典的な知識もある程度持っているピアノ奏者であることが多い。ごくたまに、とても10年近く習っていたとは言い難い学生も居たりするが、それはそれで個々に対応するまでの事である。10年と言ってもそこには当然ながら個人差があり、それは技術的なことはもとより、情緒的な音楽表現についても当然見受けられる。

基本的な読譜力を持っているピアノ歴10年ほどの学生に期待することは「豊かな表現力と自らが楽しむ」という事に尽きる。音楽という視点からは、保育士として最も重要な要素であろう。しっかりとした演奏技術を持ち、表現力に秀でた音楽性豊かな学生に対しては、自然と求めるものも高くなる。ミスなく弾ければそれで合格、という正解か否かの確認作業で済んでしまう様なレッスンであってはならない。その曲の持つ雰囲気を感じ取り、それを聴き手に伝えようとする意識が持てるよう導くことが何よりも大事なアドバイスである。現場ではまず保育士である自分自身が“楽しむ”ことが「音楽する」ことであり、それが子供たちを熱中させワクワクさせることに繋がる。そんな素晴らしい表現力が身に付いたら最高であり、保育士として大きな魅力の一つとなることだろう。

では、どうしたらそんな表現力が習得できるのだろうか？ いかに伝えようとする意識を持つか、であるとも言えるが、どのように曲調を読み取り解釈すべきか？ のヒントは、全て楽譜に書かれている。中級者以上のレベルだからこそ、そのヒントを読み取る「読譜力」が必要となってくる。表現を豊かにする方法について指導する時、ここでも改めて「譜を見ること」の大切さを伝えなくてはならない。様々な記号が持つ意味、フレージングの読み取り、音を紡いでいく息づかい、音楽の頂点はどこに在るのか等、表情豊かに演奏するコツは、先に述べたとおり「読解力」にかかっている。そのための最低限のルールを知り、譜の見方を知識として習得していく事で演奏力もどんどん磨かれていく。

表現することに貪欲な学生は1年間で素晴らしい成長を遂げることもある。そうした学生たちから「弾くことがより好きになった」「更に自信を持つことが出来た」等の感想をもらうことは、指導者として冥利に尽きることである。

7. 幼少期から12年～15年ほど習った経験者

これほどのピアノ歴がある学生は、物心つかないうちから習い始めたという場合が多い。ずっ

と辞めずに続けてきた学生、また辞めていたとしても高校入学時まで続けていた場合が多く、数年のブランクが有るかないかである。このような学生を担当する機会はそう多くはないが、やはりそれなりの自信を持った学生が多いと言える。なので、受け持つ際には演奏力や楽典的知識など、総合的なレベルを正しく把握するよう努めている。これまで歩んできたピアノ歴を尊重した上でレッスンを行う配慮が要るからである。また、時として少しばかり気を遣いながら指導する繊細さも必要だと言える。

これほどの経験があると、「表現すること」「聴き手にどう伝えるか？」といった事に重きを置いたレッスンが展開できる。だが、これだけ音楽歴が長いと、習ってきた経緯の違いも浮き彫りとなる。大きく分けて以下のような2つの例が見えてくることが多い。

ピアノという楽器に慣れていて音の出し方や表情の付け方も熟知している学生は、パイエルをミスなく正しく、そして表情豊かに弾く。これは、譜を見る習慣がしっかりとあり、更に深く読み取れる読解力が備わっているからである。この良い例とは反対に、ミスもなくスラスラと指だけは達者に動くが、曲調を感じない表情に乏しい演奏も耳にする。何も考えず何も感じず、ただ弾いているだけの、正に無味乾燥という演奏である。これは、知識が無いためにただ弾くだけになっている場合が多く、譜を見ることの重要性を教えることで大きく成長していく可能性がある。

後者の学生たちには、表現するこの意味、幼児たちに何を伝えるのか？等、これまで無関心であったであろう問題提起をして、自発的にそれについて考える意識を芽生えさせている。達者に動かせる指、器用な手を持っているのに何も伝わらないとは、非常に勿体ないことである。

「音符は読めるしリズムも解るけど、どう弾いたら良いのかが解らない」というモヤモヤとした気持ちは、上級者に最も多い悩みではないだろうか。表現におけるヒントの多くも楽譜に書かれているという真実、この事実を伝え、読み取り方を教えていく事が重要となる。

曲をどのように解釈するのか、どう演奏するよう示されているのか？これらは楽譜に載っている様々な記号やスラー、楽語などから表現の指示として読み取れる。自分一人の力で読み取る読解力を向上させることで、意思を持った演奏が出来るようになり、それが悩みを解決する手立てとなるのである。「譜を見る」そして「読み取る」という作業が表現するための有効なテクニックであると認識すると、次第に自信を持って演奏するようになり堂々と歌うようになっていく。

どうやって弾くのか解らない悩みから解放されると、歌うことにも良い変化がみられる。自信を持って伴奏を弾けることで身体の力みもなくなり、声も自然と出るようになるのであろう。

また、自分の頭の中でイメージしているものと、実際のアウトプットとの誤差を減らすことも、演奏上に於いて大事なテクニックのひとつである。とは言え、上級者レベルに相当する学生でも客観的に自分の状態を把握することは容易ではない。自分の演奏を録音し、状態を確認しながら理想や目標に近づけていく訓練が必要となる。

学生が表現することをモノにしたなと感じた時、一つ階段を上ったような達成感を指導者も覚えるものだ。これを学生と共に感じあい喜び合えることは、指導者にとって貴重な体験である。

2年次の弾き歌いの授業へとスムーズに繋げていける指導とは何か？これは常に念頭に置いて

てレッスンするよう努めていることでもある。「弾くこと」と「歌うこと」を同時に成し遂げるためには、出来る限りピアノ演奏のスキルを高めておくことが重要であろうと確信している。

また、このレベルに該当する学生には、ペダルの指導も重要である。バイエルが修了した学生は自由曲に取り組んでいくのだが、「ペダルを使う曲が弾きたい」「ペダルの踏み方をしっかりと教わりたい」という希望が多い。ペダルが上手くなるコツ、上手に踏むには「自分の音を聴くこと」に尽きる。そのためには、「ゆっくり弾くこと」が重要な練習であり、上達するための練習方法は上級者になっても初心者のそれと同じであることを改めて認識する。また「楽な練習はない」という当たり前の事にも気付かされる。「練習すること」においては、どんなレベルの学生にとっても日々の努力と根気が必要なのである。指導者として何よりも大事なものは、学生一人一人に「上達したい」という気持ちを持ち続けてもらえるよう、サポートすることである。

終わりに

今回、これまでの指導を振り返りながら書き連ねてみて、改めて思いを強くしたことがある。それは「常に一人一人、学生の気持ちに寄り添った指導をすることが大切だ」という思いである。

これは気づいてみれば全ての項で述べていることであり、私は常にこれを信念として授業に臨んできたのだな、と再確認し、この紀要をまとめる過程で改めて自覚できた。

第2項でも述べたように、グループ授業という形態で数人が見学する中、限られた時間で個人レッスンをを行い、それぞれに合った課題を与える。学生皆一人一人レベルが違い、得手不得手もそれぞれである。故に当然ながら指導内容や与えられる課題が違ってくる。それにも拘わらず、人と比べて弾けないこと、人よりも進みが遅いことで自信を無くす学生も多い。「〇〇さんは上手くていいな、私はあんなに弾けないし……」「〇〇さんは課題が多いのに私は少ないけど平気ですか？」といった不安は、授業開始からしばらくすると聞こえてくる声である。そんなやりとりを学生たちと交わす時、私は伝えていることがある。「保育士になった時、園児たちを比較しますか？ 個人差が大きい幼少期、一人一人を見て対応するでしょ？ それと同じで、皆さんのピアノのレベルが違うのは当たり前であり、一人一人に応じたレッスンをしていく事で、皆さんが一年でどれだけ成長できるかが大事、と思って接しています」と。

こういった言葉を学生に向けるのには理由がある。保育士という職業が人を、特に幼少期を相手とする仕事だからである。特定の幼児たちとほぼ毎日顔を合わせ、場合によっては親とより長い時間を過ごし、密接な関係となり得る仕事だと言える。まだあらゆる面で自立していない乳幼児には保育士による多くのサポートが必要であり、成長度合いも一人一人違うため観察と寄り添いが大切である。そして日々の積み重ねとその環境から、大きな影響を与える立場でもある。

彼女たちが保育士となって現場に出た時、私が一人一人と向き合っていたことをふと思い出して園児に接してくれたなら、こんなに嬉しいことはない。

人を育てるともいえる保育士という仕事で何より重要なものは、「子供が好きである」というシンプルなことであろう。音楽を通して学生たちと接する中で、そういった資質が問われる職業で

あることを常々痛感させられる。

様々な資質を求められる保育士。ただ、音楽の指導者としては“綺麗な声で歌い楽しそうにピアノを弾く”そんな憧れの幼稚園の先生になって欲しいと願うのである。

参考文献

「小学校教諭・幼稚園教諭・保育士をめざす人のための let's play the BEYER」圭文社

(受理日 2021年1月6日)